

漱石はスコットランドへ行ったのか : エミール・ゾラの死と関連して

毛利, 郁子
近畿大学産業理工学部 : 非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/2320097>

出版情報 : 九大日文. 32, pp.2-25, 2018-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :

漱石はスコットランドへ行ったのか

——エミール・ゾラの死と関連して——

毛利 郁子

一、はじめに

文学の価値や意味が問われる現代において、夏目漱石の文学は没後一〇〇年、生誕一五〇年を迎えても読み継がれ、語られ続けている。それは漱石が創作した作品が現代においても意味を持ち、読むものに共感をもたらすからではないだろうか。それではなぜ漱石の文学は現代においても価値をもつのか。漱石の文学とは何なのか。それらを考察するとき、彼が文学者を志した理由、そしてどのような文学者を目指したのかを問う必要があると思われる。

彼が文学者を志したのは英国留学時であった。しかし、まだ確としたものではなく、後半、特に一九〇二年九月には精神的に問題を抱えたと伝わっている。それが立ち直り、後、教師の職を捨ててまで文学者として活動するようになったのはどうしてだろうか。多胡吉郎は一〇月のスコットランドへの旅行が、漱石の作家への過程で極めて大きい意味を持つのではないかと

いう¹⁾。漱石研究者たちに旅の意義、その旅が後にどのように影響したのか考察する必要性を提言する。

留学の終わりには精神的に疲労し、「夏目狂せり」の電報までが日本に打たれていたのだが、この旅が終わり一一月に藤代禎輔²⁾（共に留学、帰日も一緒の予定）に会った時には、元氣そうに見え、帰国二年後から作家活動を本格的に始めていく。ロンドンの下宿で泣いていたと伝わる漱石が立ち直り、作家活動を始める原点はこの旅にあったのではないかと考えられるのである。行き先がスコットランドであることは本人の言及もあり、「永日小品」の「昔」にも著され、確実なこととされてきた。

スコットランドへの旅で何があったのか。ハイランドのこの世を超越したような孤高な自然に癒やされたとも考えられよう。

しかし、その同じ時間、フランスで起こった出来事を見てみる時、実はそこに漱石の作家生活に大きく影響したものがあつたのではないか、それらが作家となる一因だったのではないかと推測されるのである。漱石がその旅を始める直前、フランスでは大きな事件が起こっていた。一九〇二年九月二九日、フランスの自然主義文学者、エミール・ゾラ (Emile Zola, 1840-1902) の変死である。ゾラの死は一個人の死ではなく、ドレフユス事件というフランスの世論を二分した大きな出来事に関わつた文学者の死であつた。そのことはロンドンの新聞にも、パリと同じく九月三〇日に掲載された。ゾラが一時期亡命していたロンドンでも騒動になり、漱石も確実に知り得たことである。この事件はヨーロッパ中に瞬く間に知らされ、イタリヤやアメ

リカにも伝わり、九月三〇日のロンドンの新聞にもすでに掲載されている。もちろんスコットランドにも伝わっただろう。

そもそもスコットランド行きに関しては不明な点が多い。その時期について一〇月初旬ということはその研究書でも認めるが、下旬に関しては明確ではない。どのような鉄道ルートで行ったかも判然としない。またスコットランドに招待したとされるデイクソン (J. H. Dixon, 1837-1926) とどのような経緯で知り合ったのかも分かっていない。仲介者として、漱石の下宿の近くに留学していた岡倉由三郎³⁾説が有力とされている。この岡倉由三郎は岡倉天心の弟で、デイクソンが日本で岡倉天心と面識があるため、岡倉由三郎に対して招待したものを漱石に譲ったというのである。

この岡倉は、一九〇二年九月頃、日本の文部省に宛て「夏目狂せり」の電報を打ったのではないとも言われている。なぜなら日本の文部省から、岡倉に宛て、その時ドイツにいた藤代禎輔に夏目を保護して帰朝するように連絡せよという電報が来たからである。電報が来るということは、こちらからも電報を打ったのではないかと思われるのだ(岡倉は後否定している)。この岡倉宛に漱石から一〇月一〇日頃「目下病気をかこつてに致し、過去の事杯一切忘れ、気楽にのんきに致し居候」という手紙が来る。もし岡倉が仲介者ならば、なぜわざわざ岡倉に漱石からスコットランドにいるという手紙がくるのかと出口保夫は論じ⁴⁾、岡倉説もあやしくなる。デイクソンとどこで知り合っ

てスコットランドへ行ったのか未だに不明である。ただ漱石の手紙、後の漱石の言葉、「永日小品」の「昔」、という著作などによってスコットランド行きは確定してきたのであるが、それに伴う確実な事実は今のところないのである。

さらに漱石の言葉にも不可解な点がある。漱石からの手紙を受け取った岡倉由三郎は、それをドイツにいる藤代禎輔に送るがその時、

夏目氏よりスコットランドの Danarach, Pithochy という宿所? の名にて文通あり。

(角野喜六『漱石のロンドン』荒竹出版、一九八二年五月、二〇三頁)

という前置きが添えられていた。なぜ「?」なのか。角野は漱石の筆跡にわからないところがあつたからだと推測し、スコットランドで現地調査をして警察で調べてもらったところ「Danarach」という所はなく「Dundarach」という名の屋敷ならば存在するというので、そこがデイクソンの屋敷であり、そこに滞在したのでらうと断定した⁵⁾。その発見は昭和五五年であり、現在までそこが漱石の訪問した邸宅と定説になっているのである。そこがデイクソンの屋敷であることは確かだろうが、その「?」は筆跡がわからないということ以外の可能性もあるのである。さらに漱石が行ったとされる「Pithochy」(ピトロクリ)はスコットランドでは「ピットロツホリー」と発音する⁶⁾。「D」をスコットランドでは「ホ」と発音するからである。漱石は実際現地を訪問したのであれば、その発音を聞いたはず

であるが、なぜ「ク」と書き表すのか。表記上の問題もあるかもしれないが、特に外国語は発音を間違うと全く理解されないというのである。「断片」には「Pitro!」(ピトロ)と書いている。最低二週間は滞在しているはずであると言われているのに、表記も発音も違っている。しかし英国という視点でみるかぎり、しかも本人が発言していることなので、疑いようのないことではあった。

だがその同じ時間のフランスを見たとき、本当にスコットランドへ行つたのだろうか、フランスに行つたのではないかという可能性が浮かび上がってきたのである。一つは時間の符号である。九月までは確かに漱石はロンドンにいた。しかし一〇月の始めから居所がはつきりしない。ゾラの死は九月二十九日で三〇日に新聞が知らせ、一〇月五日に葬儀が行われる。次に場所の近さである。パリには、朝ロンドンを出れば、夕方には着く。しかもパリには留学のはじめに一週間滞在し、土地勘もあった。さらに重要なのは滞在費用である。ロンドンでも切り詰めた生活をしていたのに、パリでの生活費はどのようにしたのか。パリはホテルが高すぎて留学の最初に滞在したときも個人下宿に逗留したほどである。だがパリには一九〇〇年の万国博覧会が開催されたこともあり多くの日本人画家たちも留学していた。漱石はそのパリに留学していた画家たち、特に浅井忠、中村不折との親交が深かった。二人は子規の「写生」説に影響を与えた人物である。一九〇二年九月には、浅井自身はすでに帰国していたが、その弟子たちもいたし、中村不折も滞在していた。

そしてその日本の画家たちとの関係はデイクソンとの関係も示唆しているのである。デイクソンは日本の絵画を売買していた。当時の日本の美術関係の人物の多くに知己し、パリで中村不折にも面識があった。そこから漱石との関係も見えてくるのである。そしてなによりも漱石はパリに行きたがっていた。留学を延長してでもフランスで勉強したがつていたのである。

当時のパリの状況、漱石を取り巻く周辺人物、それにはデイクソンも含まれるが、それらを考察してみることによつて、このときの旅の意義、この旅が漱石になにをもたらしたかを考察する。一九世紀末から二〇世紀初頭に戻り、ロンドンから、パリへと視点を向けてみよう。

二、エミール・ゾラの死

ゾラは一九〇二年九月二八日メダンの別荘からパリに帰つて来た。翌朝ゾラが起きてこないのを不審に思った家政婦が床に倒れているのを発見する。暖炉の豆炭の不完全燃焼による一酸化炭素ガスが部屋に滞留したため、ゾラ夫妻は睡眠中に息苦しさで目を覚まし、ゾラは起き上がつて水か薬を飲もうと歩きしたが、すぐに倒れて気を失つた。夫人はそれに気づいていたが、動けずにベッドの中で気を失つた。一酸化炭素の濃度は床の底辺部のほうが濃いので、ゾラは倒れたまま死に至つたのである。その死は単なる事故とも考えられるが、他殺の可能性もある⁷⁾。

ゾラの死はやはり数年前からフランスを揺るがしたドレフュス事件^⑧を抜きにしては語れないのである。また逆にゾラが居なければ、「ドレフュス事件」は起こらなかったとも言えるのであった。それは文学者たちにも影響をもたらし、それゆえ、ゾラの死はまた漱石を引きつけたと考えるのである。

ドレフュス事件は、一八九四年、パリのドイツ大使館にフランス陸軍の機密情報を内通したスパイがいることが発覚し、その犯人がユダヤ人フランス軍将校ドレフュスであるとされ、逮捕されたことにより始まった。敵に内通した文書の筆跡が似ていること、アルザス出身のユダヤ人なので祖国を裏切ってもおかしくないと思われ、冤罪だったが有罪とされ、終身刑となり、フランス領ギアナの沖、悪魔島に流される。しかし九五年、ピカール少佐はエストラジー少佐が真犯人であることを発見するが、ピカールは逆に左遷されてしまう。九七年、ドレフュスの弟マチューが陸軍大臣あてに名指しでエストラジーを告発する。世論の動きに政府は対抗できず、九八年一月エストラジーは逮捕され軍法会議にかけられるが、無罪として釈放される。ドレフュスの身内や弁護士などが、ゾラに救いを求める。ゾラは最初はあまり関心がなかったが、詳しい説明を聞き、決意を固める。

一八九八年一月二三日ゾラは真犯人エストラジー釈放の翌日、新聞「ローロール」(L'aurora)紙に「l'accuse」(私は糾弾する^⑨)を掲載する。通常一万部だったが、この日だけで三〇万部を売り尽くし海外にも届いたという。第三共和国大統領フェリック

ス・フォール宛てで、「大統領、將軍たち、筆跡鑑定人、陸軍省、軍法会議」それぞれの罪状を挙げ、糾弾する。これは大反響をもたらし、そこからフランス中を二分する大事件になり、単なる個人の冤罪事件ではなくなった。

渡辺一民によると反ドレフュス側は、ナシヨナリスト、カトリック教徒などであり、パリのみならず、地方都市でも、ドレフュスを殺せ、ゾラを断頭台に、陸軍万歳と叫びながらユダヤ人商店街を暴徒が襲った^⑩。右翼や教会、そして保守勢力がゾラ批判の立場をとったことにべつだんの不思議はないのであった。「私は弾劾する」の目指しているものは軍部や体制の批判であったからである。社会主義者もドレフュスが資本家階級に入ると考え味方しようとは考えなかった。

ドレフュス派は少数だった。ドレフュスの味方したのは、「ローロール」紙に「一〇四人宣言」をした、多くが無名の若い文学者たちであった。アナトール・フランス(Anatole France, 1844-1924)が唯一の有名人だった。ドレフュス派はその意見を明かにすれば身の危険さえ招く状況のなかで、人から強制されることもなく、あえて自発的に署名をした。反対派の新聞は彼らを侮蔑して「知識人」(Intellectuels)^⑪と呼んだ。その後も熱烈な署名活動が続けられる。彼らは「真実」「正義」を主張する。シャルル・ペギー(Charles Peguy, 1873-1914)の言葉がある^⑫。

ただ一つの不正、ただ一つの犯罪、ただ一つの不法行為でも社会契約を破り、またそれを破るに十分である。そ

れは肉体全体を腐敗させる一個の壞疽である。われわれが擁護するのは単にわれわれの全民族歴史的な名誉でありわれわれの父祖の名誉であり、われわれの子孫の名誉である。われわれが多くの過去を背後に持つていなければならないほど、一層それをけがさないようしなければならぬ。

(河盛好藏『フランス文壇史』文藝春秋新社、一九六一年三月、一三八頁)

これに対する反ドレフュス派の文学者は大家のものたち、評論家で『両世界論』誌の主幹であったフェルディナンド・ブリュンティエール (Ferdinand Brunetiere, 1849-1906) や観念小説でフランス知識人青年層に影響を与えたモーリス・バレス (Maurois Barres, 1862-1923)、自然主義批判をしたポール・ブルジエ (Paul Bouget, 1832-1935) などであった。バレスはロレーヌ州に生まれ一八七〇年普仏戦争時、故郷がドイツ軍に蹂躪されるという経験から、国家主義的にならざるを得なかった⁽²⁾。普仏戦争で、パリ市民は籠城戦をとりネズミまで食べたという。そのときフランス軍は壮絶に戦い、その軍を侮辱することは国家をも裏切ることであった。ブルジエは問題小説 (roman a these) である『宿駅』⁽³⁾ を書いて、社会の急激な変化は人間に不幸をもたらすと体制の保持を主張し、ドレフュス派を小説の中で批判する。渡辺によればこのように、文学者が中心であった以上「書く」という行為が推進された。状況報告や政治論文ばかりでなく、作品論、作家論、小説、詩、戯曲といったあらゆる文学ジャン

ルが動員される。彼らの論争は新聞から文芸雑誌の中で行われ世論形成に大きな役割をはたしていく。フランス中が二分して論争し、家族内でも論争になった。このドレフュス事件は単なる事件ではなく、「単に知的な事件ではなく知識人の事件」であり、誰もが己の思想、生き方を根本から問われた事件であった。当時二〇代で事件を生きた人々の内面に癒やしがたい傷をのこし、二〇世紀前半の文学の内的原点になったという。マルセル・ブルースト (Marcel Proust, 1871-1922)、シャルル・ベギー、ロマン・ロラン (Romain Rolland, 1866-1944)、アンドレ・ジード (Andre Gide, 1869-1951) などである。もちろんドレフュス事件はさまざまな面にも影響を与え、文学だけの問題ではなかったのではあるが。

エミール・ゾラは一九七〇年代実験小説『テレーズ・ラカン』を刊行、続く『居酒屋』で「自然主義の勝利」という新聞記事が出るほどの成功を収めていた⁽⁴⁾。その後もルーゴン・マッカーール叢書を書き続け、自然主義文学者として成功していた。しかしモラル問題が生じ、ポール・ブルジエの批判により、文学的には陰りが見えてきていた。次のデカダンス文学、象徴主義の文学は想像力の世界にこもり、「世界が造られたる目的は美しき本を出さんが為めなり」とステファヌ・マラルメ (Stephane Mallarme, 1842-1898) は豪語⁽⁵⁾、商業、製造、政治、行政や自然を嫌悪し、芸術家の側からその時代の政治的、社会的生活への参加を一切拒否してきた。しかし一九九〇年代以降、二一世紀の影響もあり、行動への復帰とエネルギー礼賛は作家と

政治生活という問題を提起することになる。一九九五年以降、文壇の政治活動への参加が提起され、またナシヨナリズムが台頭してきていた。⁽⁶⁾ゾラは文学的には全盛期を過ぎていたが、初期の頃のジャーナリストとしての側面は、決して忘れた訳ではなかった。

最初、ドレフュス派の劣勢は著しく、ゾラは陸軍の幹部たちを侮辱した罪で逆に裁判にかけられる。一八九八年二月から七月まで裁判が行われ、ゾラは有罪になり、英国へ亡命する。英国では偽名で場所を変えつつ創作活動もしたが、英国人はゾラをかばい助けてくれた。そして次第に真実は明らかになり、やはり犯人はエストラジーであることがわかり、ドレフュス再審の要求が高まってきた。内閣総辞職、大統領の急死なども重なり、一八九九年六月、ドレフュスは再審のため悪魔島から召喚される。それに伴いゾラも六月五日帰国する。レンヌで行われたドレフュス再審は再び有罪となったが、大統領特赦があり、釈放される。ドレフュス派の一応の勝利であった。また完全ではなかったが、軍と政府の名譽が損なわれたことは確かであった。

そして一九〇〇年、第五回パリ万博⁽⁷⁾は開かれる。前年まで烈しく争ったことを忘れたかのように、事実忘れさせるために「世紀の哲学と総合。フランスの明晰な天稟を映し出す偉大さと優しさと美しさの表現」という標語を掲げ、四月一四日（一月二日開幕）に開幕した。アール・ヌーボー様式の門、五つの会場に機械館、電気宮殿、世界一周パノラマ、動く歩道など

を配し、世界中から陳列品を取り寄せ近代文明の粋を集めていた。ゾラは広角カメラで万博の写真をとったり、文学活動に勤しんだりしていた⁽⁸⁾。一方ドレフュスは一九〇六年の無罪を勝ち取るまでまだ完全な自由を持っていた訳ではなかった。

そのような中、一〇月二日漱石は英国への留学の途中パリに到着する。漱石はその時、そのような争いがあったことなどれほど知っていただろうか。一週間ほど滞在して万博を見学しロンドンへ出発する。ところが翌一九〇一年二月、ロンドンに着いてわずか三ヶ月ほどして、

二月九日（土）、狩野亨吉・大塚保治・管虎雄・山川信次郎に連名で宛てた手紙に、留学を延期して四、五か月フランスに行きたいと思うから狩野亨吉から上田万年に話してほしい。

（荒正人「漱石研究年表」『漱石全集』別巻、集英社、一九七四年一〇月、一六九頁）

同じ一九〇一年九月、留学一〇ヶ月後、

九月一二日（木）寺田寅彦宛手紙に「僕は留学期限を一年のばして仏蘭西へ行き度が聞き届けられそうにない」。この頃、フランスへ留学することを本気で考えていたらしい。（桜井房記にも頼んだが、文部省では延長を一切認めないと伝えて来る。）（荒正人「漱石研究年表」前掲、一九一頁）

このことはなにを意味するだろうか。四、五ヶ月から一年と留学希望の時間まで増えている。しかし文部省から拒否されてしまった。現在でも文部省に逆らえる教師がいるだろうか。まして国費留学の身である。このことが後パリに行つたことを隠す原因ではないだろうか。しかたなく一年程勉強に熱中し、精神的に病気になってしまう。一九〇二年九月「夏目狂せり」の電報が誰かから日本に打たれ、文部省から岡倉由三郎宛、藤代禎輔に夏目を保護し連れ帰るようという電報がくる。

そしてちょうど同じ時、一九〇二年九月二十九日ゾラは死亡する。ゾラは前日二八日にメダンの別荘から、パリ、ブリュッセル街にある自宅に帰ってきた。翌朝寢室の暖炉の火の不完全燃焼により一酸化中毒死しているゾラが見つかった。ニュースは瞬く間にパリ全市に伝わり、警察、新聞社や群衆がゾラのアパートの前で騒ぎ立て、九月三〇日の新聞はゾラの死を一斉に報じた。「ル・マタン」(Le Matin)紙は当時珍しい挿絵付きであった。右翼の新聞はゾラ自殺を報じ、左翼の新聞は参謀本部の陰謀により殺されたと言う主張を掲げ、警察は死因を調べる。ドレフュス事件では様々な死人も出、状況的に他殺説は決して不自然ではなかった。そしてロンドンでも同じ九月三〇日「タイムズ」(The Times)紙に「Death of M. Emile Zola」(エミール・ゾラ氏の死として三、四面全部を使って掲載された⁵⁹⁾。死亡時の様子やメダンから帰って来た時、ゾラ夫人は暖炉の床の状態がおかしいので召使いに修理するよう注意したが、その後の様子が不明で、そのままになり中毒を起こしたので、警察が事情聴取を

していること、またゾラについての経歴が詳しく記されていた。ロンドンでも騒動になり、漱石も知ったことは確実である。その記事には、ゾラの生まれ故郷のイタリアで皆が嘆いていることも書かれている。あつという間にヨーロッパ中に伝わったのである。

一〇月五日ゾラを送る葬列がモンマルトルの墓地まで続き、数万の参会者を集めて行われた。モンマルトルの墓地は丘に向かつて歩くと、横に下へ向かう階段があり、降りていくと円形広場がある。そこから放射線上に小道があり墓地が続くが、ゾラの墓は円形広場の正面に少し小高いところに胸像とともにある。他の墓と際立って異なり、髪の毛が逆立っているようである。政府を代表してシヨミエ文相、文芸家教会を代表してアベル・ノルマン、友人代表アナトール・フランスが弔辞を読む。反ドレフュス派だったノルマンは作品のこと以外いっさい触れようとしない。アナトール・フランスは、ゾラの勇氣ある行動がフランスを目覚めさせたと最大級の賛辞を送った⁶⁰⁾。

漱石は、これを聞いた可能性がある。聞くことが可能だった。一〇月初旬に旅行に行ったということは、旅行の時期が不明の中で、どの説も一致していることである。時間的にはびつたりと符合するのである。この葬儀にはアナトール・フランスだけではなく多くの文学者たち、ドレフュス派も反ドレフュス派も来ていた。そしてゾラの死を悼んだろう。まさに当時活躍していた文学者たち、ドレフュス事件をその存立、その文学を賭けて生きてきた文学者たちがいたのである。文学とはなにか。文

学とはどれほどの価値あるものか。文学とは命を賭けるものか。文学とは国の行方にも係わるものか。ゾラの死、ドレフュス事件はそのようなことを漱石に考えさせたはずだ。そしてそのまま漱石は一〇月末までパリに滞在したと筆者は推測する。モンマルトルの墓地へやって来るのは簡単である。留学の最初の時、通ったルートを来ればよいのである。当時でもパリはロンドンを朝出れば夕方着くのである。また帰るのも簡単だ。最初はずぐ帰るつもりだったろう。しかし漱石がパリに残ることのできる条件があったのである。

三、周辺人物

漱石をスコットランドに招待したとされるのは、デイクソンという人物であるが、彼と浅井忠など美術関係の人物たちとの関連を見ることで、漱石とデイクソンとの出会いの可能性を探り、漱石のパリ滞在を想定する。その際、当時の日本美術界の様子、またフランスの美術界やジャポニズムに関しても言及する。デイクソンとの関係を明らかにするにはそれらの理解が必要だからである。

a、浅井忠

時間的には後戻りするが浅井忠は漱石が留学の始め一九〇〇年一〇月、パリに着いた時に最初に探した人物である。すぐに

は会えなかったが、四日目に出会い一緒にパリ万博を見物している。浅井は東京美術学校の教授として、すでに四月に、臨時監査官の役と二年間のフランス留学を命ぜられ、先に来ていた。五月五日の法隆寺金堂風の日本館の開場に向け博覧会囑託として仕事をし、また自作の洋画「海岸」⁽¹⁾の展示をしていた。なぜ漱石が浅井を探したのかは子規との関係が大きいだろう。浅井はパリ出発時、子規庵で送別会をされ、そのことは一九〇〇年一月『ホトトギス』に「浅井先生送別会 虚子記」⁽²⁾として残されている。子規は、俳句革新運動を展開するとき、文学的理念として対象の写実的な再現を目指す「写生」を掲げた。その「写生」論は浅井忠、中村不折⁽³⁾ら洋画家からの影響であるといわれている。子規は社員であった新聞「日本」で挿絵を描いた中村不折と知りあつた。明治二十七年、新聞「日本」傘下に家庭向け新聞「小日本」が発刊され、主筆となつた子規のもとで不折は挿絵を担当する。不折の写生画とその制作過程は自然の発見、再現的技法の深化という課題において、句作と共通する課題をもつものであつた⁽⁴⁾。また『ホトトギス』の表紙絵を、不折は一八九八年第二巻第一号から、浅井忠は第二巻第三号から描いている。

浅井忠に関しては日本洋画界の事情を抜きにしては語れないだろう⁽⁵⁾。明治政府の欧化政策のもとで一八七六年、工部大学校の附属機関として「工部美術学校」が設置された。浅井はその最初の生徒であり、他には小山正太郎、五姓田義松などがいた。西欧文化の移植として当然お雇い外国人が起用されたが、

全てイタリア人であり、画科にはアントニオ・フォンタネージ⁽²⁶⁾ (Antonio Fontanesi, 1813-1882) が招かれた。彼の教えは、西洋絵画の骨格を教える基本的なもので、遠近画法、解剖学をといいた。その第一弟子として浅井は多くの西洋風絵画を描いた。しかしアーネス・フェノロサと岡倉天心によって日本美術の再評価が行われ、国粹主義が台頭してきた。こうした背景の中、一八八二年に彫刻科が廃止、翌年には画学科も廃止されて、「工部美術学校」は廃校に到った。そして「工部美術部」を統合・改編して東京美術学校が設立されたが、それは西洋画を排除したものであったので、西洋画家たちの失意は大きかった。そこで排除に對抗して工部美術学校出身の西洋美術作家たちを中心に、当時の洋画家ほぼ全員約八〇名が大団結して発足したのが「明治美術会」であり、のちに太平洋画会になる。そこに九三年フランスから帰朝した黒田清輝が入会することになった。しかし黒田がもたらした印象派風の新画風はフォンタネージの影響のある浅井たちとは異なり、後に新派、紫派と称されたのに対して、従来(旧工部美術学校系)の画家たちは旧派、脂派と呼ばれるようになった。対立は大きくなり九六年には黒田らが明治美術会を脱退し、「白馬会」を結成する。その後黒田の力により東京美術学校に西洋画科が設置され、九八年には旧派側の浅井忠も同校の教授となる。そして翌年浅井はパリ万博の指揮もあり、海外留学を命ぜられたのである。

漱石と浅井は日本では面識があつたかどうかはわからない

が、漱石は子規を通さずとも美術界の様子はわかつていただろうし、浅井は『ホトトギス』に表紙絵を書き、はつきりとはしないが、送別会には漱石も出席した可能性もあるという。浅井はパリから「巴里消息」を『ホトトギス』に二度投稿する。一度目は一九〇〇年六月号、二度目は一九〇〇年一〇月号に掲載されている。どちらも漱石は日本で、パリに着く以前に読んでいたはずである。そのためにパリに着いてすぐ浅井を探したのだと思われる(読んでいなくても『ホトトギス』はロンドンに送られている)。二度目の一〇月号の「巴里消息」には注目すべきことが書かれていた。

当所のピンググといふ人は有名の骨董商にして且図按家候。同氏は日本の古書古物類を非常に集めて欧州諸国へ其趣味を紹介したる一人なるは確かなる事実の有之候。先日來二度許り同氏の家を訪ひ見物致候。実にありとあらゆる日本品を集めて陶器などの極上のもは可驚程集め居候。掛け物、錦絵、書本類など如山有之候。鑑定眼は我等など及ぶ所に無之候。福地氏が同行して国刷物を沢山携へ行き見せ候所、古書の名を一々當善きもの無洩選り出すには感心致候。同氏は図にして、店に多くの図按家と、あらゆる職人とをて、金属彫刻、陶磁、ガラス、木彫、建築何でもの家で製造して(略)実に羨ましき生活にして、面白く金もうけ出来て、愉快なことに感じ申候。同氏の仕事は総て一の方式ありて、線のずるずる延びたるぐりぐり式と我等

は唱居候。(略)随分学者にしてよく分かりたる人なれど、うけが旨くてユダヤ人故悪くいふ人も多く有之(略)他当地にて日本好きの人沢山有之、学者美術家にして日本の考古学に明るき美術品に鑑識のある人達に物を見せて咄しをしても能く分かるには感心致候。

(浅井黙語「巴里消息」『ホトトギス』第四卷第一号 ホトトギス社、一九〇〇年一〇月、二九頁)

こゝで「ピング」と言われるのはサミュエル・ピング (Samuel Bing, 1838-1905) である。彼は一八九五年にパリ、プロヴァンス街に「メゾン・ド・アールヌーボー」(Maison de Art Nouveau) を開店し、アール・ヌーボー様式の発展に寄与した。一九〇〇年のパリ万博はアール・ヌーボーの勝利を祝う祭りでもあった。それはコンコルド広場に立てられた巨大なピネ門 (Le Porte Pinet) に象徴的に表されていた。

浅井はピングが「日本の古書、古物類を非常に集めて欧州諸国に紹介した人物の一人」だと書いている。このことから、ジャポニズムの世界が一気に視野に入ってくるのである。ピングは日本の浮世絵などの美術品を欧州に大量にもたらした人物のひとつであった。ピングほど有名ではなくともそのような人物は多くいたと書かれている。デイクソンはピングと同じ頃生まれている。英国人ではあったが、ピングと同じ時代を生きている。ジャポニズムはフランスだけではなく、英国など西欧諸国に広まっている。日本人商人としては林忠正⁽⁷⁾がいる。ジャポ

ニズムの始まりは「北斎漫画」⁽⁸⁾ (Hokusai Sketch, オクサイ・スケッチ) の発見であったといわれる。それまでも日本からは陶器類などが輸出されていたが、それを包んでいた紙、北斎をはじめとした浮世絵などが爆発的に人気となったのである。それに目を付けた人物が日本に買い付けに行き、莫大な財産を築いたのだ。浅井も「面白く金もうけ出来て」と書いている。このジャポニズムの浸透は多くの文学者たちによっても記されている。ゴンクールには『北斎』、『歌麿』という著作もある。また次のようなモーパッサンの言葉によつてうかがい知れる。

日本が流行っている。日本の美術骨董品を持っていないパリの通りは一つもない。日本の骨董品でぎっしり詰まっている花瓶、美しい女の閨房あるいはサロンは全くない。日本の花瓶、日本の掛け物、日本の絹製品、日本のおもちゃ、マッチ箱、硯箱、茶道具、皿、婦人服さえも、髪型も、宝石、腰かけ、今やすべてが日本からやつてくる。

(モーパッサン「中国と日本」ル・ゴローワ (Le Gaulois) 紙、一八八〇年二月三日)

サミュエル・ピングは日本美術品のコレクターかつディーラーであり、アール・ヌーボーの係わりのもとには日本の古い美術品の収集と紹介とがあった⁽⁹⁾。彼はそれまでのエキゾチシズムの憧憬の色が濃かった東洋趣味を「実証的なもの」に変えようと、雑誌『芸術の日本』(Le Japon Artistique)⁽¹⁰⁾を一八八九年創刊

している。九〇年代には政府の公的な命令を受けて、アメリカと並んで日本の応用芸術の研究調査を行っている。ピングの意図は、単に日本美術を紹介しようとしているのではない。ヨーロッパ人の眼からみて、日本人の生活全般が芸術的であることを強調し、その意義を伝えようとしていたのである。一九世紀にはヨーロッパの芸術至上主義が極点に達し、方向性を見失っていた。芸術の精神性を逆に生活の中であつてなげ止めておく方法、芸術を生活とかかわらせ、なおかつそうすることによって生活そのものを芸術化させる方法を日本美術から学ぶとピングはいう⁽³¹⁾。

さらにこの日本絵画の影響は印象派の画家たちにも及んだ。マネ、ルノワール、モネ、ゴッホなどである。ゴッホはテオ宛ての手紙に、「僕の仕事はみんな多少とも日本の絵が基本になっている」と書くのである。ゴッホがピングのオール・ヌーボー館で数千枚という浮世絵を漁っていたことは有名である。そのようなジャポニズムを経て、オール・ヌーボーは生み出された。

さらに浅井はピングが「図案家と職人をおいている」と書く。図案は歌麿の版画や光琳の絵、さらに着物、江戸小紋の図案をもとに花や植物などの有機的なモチーフや自由曲線の組み合わせによる従来の様式に囚われないものであつた。花や鳥や動物などが様々に繋がり、模様を構成する。その模様を浅井は「線のずるずる延びたるぐりぐり式」と表現し、日本に伝えたのである。素材は「金属彫刻、陶磁、ガラス、木彫、建築」と浅井

がいうように当時の新素材や、工芸品、グラフィックデザインなど多岐にわたつた⁽³²⁾。それは「三四郎」(『朝日新聞』明治四一・九〜二〇)の中で淀見軒というライスカレー屋の建物様式として漱石によって表現され、建築にもヌーボー式があるのかと三四郎は驚いている。他にも「野分」(『ホトトギス』明治四〇・一)の「ヌーボー式の簪」、「行人」(『朝日新聞』大正元・一二〜大正二・一二)の「セゼツシヨン式の一輪瓶」もある。「セゼツシヨン式」とはオール・ヌーボーのドイツ語名である。

浅井は、最初の「巴里消息」では日本のものは「顔色なし」や「日本の出品には実に嘔吐を催し候」などと書いていたが、フランスでは日本のものが評価され、ピングのように高価なものを所有し、日本美術に詳しい人がたくさんいるのだと留学中次第にわかってくる。日本のものを取り入れるだけではなく、オール・ヌーボー様式として新しい芸術が生み出されていたのだ。浅井にとつては、思いもよらない非常な驚きであつたらう。浅井は一九〇二年六月、留学を終え帰国する時に、ロンドンに立ち寄つて漱石の下宿に一週間ほど滞在しているが、二年間の留学によって得たものを漱石に詳しく伝えたであろう。美術のことのみならず、文学の状況、ドレフュス事件についてもである。そしてこの美術関係の人物たちと関わりがあつたのがディクソンであつた。

b. ディクソン (J. H. Dixon, 1837-1926)

デイクソンについては弁護士であったこと、スコットランドに広大な屋敷をもっていたことがわかっているが、彼はサミュエル・ビングのように、日本の芸術と深い関わりを持っていたのである。多胡吉郎によるとデイクソンは美術愛好家で一八九九年から三年近くも世界周遊に出かけ、日本にも一年あまり滞在した⁽³³⁾。一九〇二年の四月くらいからスコットランドのピトロクリに居をかまえ日本庭園も造ったが、もともとイン格蘭ド人であった。そして漱石が英国留学から、帰っていった一九〇二年一月五日の五日後、一月一日、ロンドンのジャパン・ソサエティの第六三回例会で“On Some Japanese Artists of To-day”(幾人かの今日のアーティストたちについて)と題して講演を行っている。それが、『倫敦日本協会雑誌』に残っている。ここで日本の美術の特徴を述べた後、司馬江漢が長崎でヨーロッパスタイルを学び、その影響が渡辺崋山や北斎、広重に及び、それによって北斎などがヨーロッパで受け入れられたという自説を述べる。一般的意見ではないがと断りを入れるが、かなり専門家であることを示している。

Mr. S. Koyama and C. Asai, who are to-day amongst the leading artists of Tokyo, took lessons under Togat Kawakami.

(S・小山氏とC・浅井氏は今日の東京の指導的なアーティストであるが、川上冬崖のもので教えを受けている)⁽³⁴⁾

デイクソンは小山正太郎や浅井忠が日本の指導的画家である

ことを知っていた。さらに「工部美術学校」でイタリア人指導者が教えたこと、また、黒田清輝が帰って来て、白馬会を創り分裂したこと、浅井たちが旧派とよばれ、黒田たちが新派とよばれているという日本の明治以降の美術会の様子を講演している。そしてこの事情を教えているのは、

Mr. C. Fujiwara, now studying in Paris, who has kindly given me much information,

(C・藤原氏が、今パリで勉強しているが、彼が私に多くの情報を教えてくれている)⁽³⁵⁾

今パリで勉強しているC・藤原が明治の美術界の状況をデイクソンに教えているというのである。この「今」はデイクソンにとってロンドンの一九〇二年一月一日であるが、藤原にとつてはいつだろうか。浅井は一九〇二年六月までパリにいたが、浅井については「今」とは書かれていないので、藤原の「今」は一九〇二年六月から一月一日の間であろう。そして「今」と言っているかぎり一月一日に限りなく近いが、発表の準備に時間もかかるだろうから一月、一〇月くらいになる⁽³⁶⁾。

Several young artists besides those already mentioned are studying art in Paris at the present time. Mr. S. Wada is one of them. The number of young Japanese artists who come to

Europe to study, is increasing every year.

(これまですでに述べたもの以外にも若い多くのアーティストたちが今パリで勉強している。S・和田もそのうちのひとりだ。ヨーロッパに勉強のため来ている若い日本の芸術家は毎年増え続けている。)⁽³⁶⁾

そのほかにもたくさん日本人芸術家がいるということを知っているので、単なる伝聞ではなく、デイクソン自身がパリに調査に行っていることを示している。デイクソンは一九〇二年四月以降から十一月くらいの間どの時期かにパリにいたのである。

さらに、この発表で注目すべきことがある。

Mr. Nakamura, a young Japanese artist of promise, now studying in Paris,

(若い有望な日本の芸術家である中村氏は、今パリで勉強していて)⁽³⁷⁾

この「中村」の下の名前は書かれていないが、中村不折ではないか。中村は「promise」(有望な)と表現されているが、不折はその時すでに『ホトトギス』に表紙絵を描いたりしてすでに実績のある人物であるからそう表現されてもおかしくはない。

C・藤原やS・和田は有名にならなかつたせいか今では誰であるかわからないが、不折は一九〇一年六月から一九〇五年までフランス留学し、コラン(Raphael Collin, 1850-1916)やジャン・ポール・ロランス(Gean-poul Laurens, 1838-1921)に学び(原武哲、石田忠

彦、海老井英次編『漱石漱石周辺人物事典』笠間書院、二〇一四年七月、二五八頁)、パリのコンクールにも入賞している。デイクソンは、中村に尾形乾山の絵を見た時のノートなどを見せてもらって感謝していると言っている。不折は浅井忠に絵画を師事し、子規の編集する新聞「新日本」、「日本」などに挿絵を描き、日清戦争にも子規とともに従軍記者として中国に渡る。そこで書に興味を抱き、戦後中国と朝鮮を周遊し、貴重な書画骨董を鑑賞収集したことが、後に書家として名をなすものになったのである。不折から尾形乾山に関するノートを見せてもらったということも不思議ではない。留学中、不折の「巴里より」、「巴里より来状」⁽³⁸⁾が『ホトトギス』に掲載されている。不折はその中で日本人とアメリカ人の留学生が多く、特にアメリカではサロンで賞がもらえるとして一五年間の留学を政府に保証してもらえらるで、今後はアメリカが世界一の美術国になるだろうと記述している。それに反して日本人は二年程度の留学でどれほどの力ができようかと嘆いている。パリはやはり世界中から留学生が集まり、美術を学ぶ芸術の都であった。デイクソンにとつても日本と同じく魅力的な場所であり、コランやロランスが教える私立の美術学校アカデミー・ジュリアンや官立美術学校エコール・デ・ボザールを訪ね、そこで日本人留学生や不折に出会った可能性が高い。デイクソンは、一九〇二年の一二月に日本人留学が「今」パリにいると言っているその時間の前にパリに行ったことは間違いない。

漱石は英国留学時のノート⁽³⁹⁾に、不折の留学費の不足や生活

の困窮ぶりを例にとり芸術家の生活難について書いている。また不折も子規への手紙に、漱石に会ったら鯉節一本やると書き、二人が非常に近いところで交流可能であることがわかる。漱石とデイクソンがどこで会い、どうしてスコットランドに行ったか現在でもはっきりしていないが、パリという場でデイクソンと日本人の美術家たちとの交流があり、漱石と日本人画家との交流もあったのであるから、そこから漱石とデイクソンとの繋りの可能性も見えてくるのである。

さらに発表は続き、デイクソンが東京、大阪、京都、日光などへ行き、作家たちと会ったことを述べている。日本の作家の現代の絵を取得したいと思う外国人はいくつかの展示会に行くべきだという。特に一九〇三年の大阪で開かれるだろう第五回内国勸業博覧会に行けば現代のいい絵が手に入るだろうという。石川欽一郎、石川寅治、三宅克己、五姓田芳柳二世、五百城文哉などを日本で訪ねたことを発表する。一八八〇年代ピークを迎えたジャポニズムはこの頃は隆盛は過ぎ去っていた。今日（明治）新しい日本の画家たちはまた何か生み出しているに違いないと考えたのではないか。浮世絵などを日本人自身は、過小評価していたのだから、明治の画家たちの作品も自分たち西欧人がよいものを発見できるかもしれない。もちろんそこには、コレクターとしてだけではなく、ディーラーとしての目があつた。そうでなければ、世界を周遊したり、スコットランドに宏大な住宅をもったり、日本庭園を作る財力はなかつたはずである。浅井も「巴里消息」に、日本好きの人はたくさんいて、

みんな観察力も優れていると書いている。ピングほど有名ではないが、ピングのような仕事をしている人、財力もあり、知識もある英国人もいたのは確かである。

また浅井が住んでいたアバルマントがあるアヴェエニュー・マラコフ五八番地（今は地名が異なる）はパリでも最高級の住宅地にあり凱旋門や万博会場、エッフェル塔も間近に望むところであつた。浅井はそこに池辺義象と福地天香と三人で暮らしていた。⁽⁴⁰⁾ 新しく来たものは以前の日本人のアバートを頼り、近くで暮らしていただろう。漱石が留学の最初に宿泊したノディエ夫人の下宿も歩いて一〇分のところであつた。そこにまた宿泊したかもしれないし、金銭的都合から浅井の弟子たちや不折のところに行ったかもしれない。美術関係の知人はパリにたくさんいたのである。文部省関係の人は避けただろうが、デイクソンもパリにいた日本人の画家たちを日本でしたように訪ね歩いただろう。印象派、後期印象派やアール・ヌーヴォーの芸術家たちが集うパリは日本と同じく魅力的な場所であり、たびたび訪れていたことは確実である。漱石は一〇日ほど過ぎた頃、ロンドンで自分が居なくなつたと騒がれるのではないかと危惧してきた。実際「夏目狂せり」の電報を打たれているのだから、また漱石失踪が打電されるかもしれない。なんとかしなければならぬ。その時デイクソンはスコットランドに漱石を招待しただろうか。

And so help to give these worthy young men the chance they

are longing for to go ahead and show what is in them.

(このような価値ある若者たちが望む機会を与えることを助けてほしい——彼らは前進し彼らの中にあるものをしめすだろう。)⁽⁴⁾

そのようなデイクソンであつたからパリにいたい漱石を手助けしてくれたらう。最初にも指摘したとおり、ピトロクリに關しては綴りも発音も間違つてゐる。最低二週間滞在してゐたといわれているのに、そのようなことがあるのだろうか。

漱石は留学の初期から期間を延長してでもフランス留学を望んでゐた。フランス文学を勉強し、その意義を認識し始めてゐる。フランス文学は社会の急激な変化の中で様々に生じてゐる。ロマン主義の熱狂から、社会や文化をもつと客觀的に考察しなければならぬという欲求の中でレアリズム文学が生じてきた。スタンダールは「文学は社会を映す鏡」であるといひ、バルザックは社会とそこに生きる人間をくまなく探究した人間喜劇を書いた。自然主義文学の勝利を宣言し、社会の底辺を探つたゾラはルーゴン・マッカール叢書を創作した。それに対し、

ポール・ブルジェは自然主義文学が読者にペシミズムをもたらすとし、若者たちに精神の主体性を持つと語りかける。さらに作家には社会的責任があると言ふ。それは一〇年程前のことである。そして今まさに一ユダヤ人の人権をめぐつて身の危険を顧みず論争するフランスの文学者たちがいた。その先頭に立つてゐたゾラの死がまさに目の前で起こつてゐた。文学はただの娯樂ではなく、社会のあり方、個人の生き方、死に方を問う

ものであつた。

ここで事件の系列を略歴に表してみよう。

一八九四年	ドレフェウス事件起こる
一八九八年一月	ゾラ「ローロール」紙に「私は糾弾する」を掲載する
七月	ゾラ英国へ亡命する
一八九九年六月	ゾラ英国より帰国
一九〇〇年四月	浅井忠パリに到着
四月一日	第五回パリ万博開幕
一〇月	漱石パリ到着
十一月二日	パリ万博閉幕
一九〇一年六月	中村不折パリ到着
九月	漱石文部省にフランス留学を請願する
一九〇二年六月	浅井忠帰国のためロンドンの漱石の下宿にたちよる
一九〇二年九月	「夏目狂せり」の電報日本に打たれる
九月二九日	ゾラ一酸化中毒死
三〇日	ゾラの死ロンドンの新聞に掲載
一〇月五日	ゾラの葬儀 モンマルトル墓地
一〇月一〇日	漱石より岡倉由三郎に手紙が来る
十一月五日	藤代禎輔ロンドンで漱石に会い帰国

一二月五日 漱石ロンドンから帰国の船に乗る
一二月一日 デイクソン、ロンドンのジャパンソ
サイエティの第六回例会で発表する
ドレフュス無罪を勝ち取る
一九〇六年

四、作品

漱石の作品を検証してみよう。

一九〇二年一〇月末？ 漱石は自分で帰国の船のキャンセルをする。それを知らず、一月五日に藤代禎輔がドイツから一緒に帰国しようとやって来る。六日に漱石と会い、漱石の下宿に宿泊するが、漱石は本が多く片づいてないの言い訳にして帰国をのぼすという。説得したが、藤代は漱石が元氣そうなので、一人で帰ってしまった。その後一ヶ月ロンドンに残る。当時、二週間に一度の日本行きの船があったが、もう二週間残り、一二月五日に帰国の船に乗る。なぜ残ったのかはこれまでも疑問とされてきた。いくつかの仮説があるが、その時パリはどうだったかみてみよう。ドレフュス事件は不可解な事件だったし、死人も負傷者も多い。文書偽造で逮捕されたアンリ大佐の獄中自殺は不可解とされる。大統領の急死、ゾラの弁護士の負傷、右翼や左翼の暴行などからも、ゾラの死は当然自然死以外の可能性も疑われた。デモでは何回も「ゾラを殺せ」という言葉が叫ばれている。実際警察は捜査をし、検証本も残されている。パリ中の騒動は一カ月では収まらなかったろう。一九〇六年ド

レフュスの無罪が確定し、ゾラの遺骸がパンテオンに移送される時もドレフュスは発砲され肩に疵を負う。それほど危険な事件であったので、他殺の可能性を誰もが考えただろうし、新聞も疑わしい点を報じていた。結局、事故死とされたが。実際一九五〇年頃、煙突に細工をしたという人が現れたが、時間がたち過ぎていてそのまま放置された。しかしその一九〇二年一月頃は新聞記事などからも漱石は犯人が見つかるのではないかと思っただけだ。

一月下旬、高浜虚子と河東碧梧桐から「子規臨終の様子」を書いた手紙がくる。その返信に次のような俳句があった。

筒袖や秋の棺にしたがはず

手向くべき線香もなくて暮の秋

霧黄なる市に動くや影法師

きりぎりすの昔を忍び帰るべし

招かざる薄に帰り来る人ぞ

この第三句「霧黄なる市に動くや影法師」は

ロンドンの濃い霧の中を影絵のように動く人々。死んだ親友の幻も動いているかも知れない。

(大岡信『拝啓漱石先生』世界文化社、一九九九年六月、二三二頁)

としても読めるだろう。しかし、ロンドンの霧は灰色、もしくは

は黒く、肺まで届き、黒い痰がでたという。⁽⁴²⁾「永日小品」の「霧」にも「黒い色に染められた重たい霧」に帰りがわからなくなった様子が描かれている。確かにイギリスのロマン主義の画家ターナー (Joseph Mallord William Turner, 1775-1851) は、ロンドンを黄色として描いた⁽⁴³⁾。しかしそれは一九世紀前半であった。漱石の実感では、ロンドンの霧は黄色と表現できないのではないだろうか。それでは「霧黄なる市」とはどこであろうか。パリである。パリはそれほど工業化が進んでいず、空気もそれほど汚れていなかった。また漢書に「黄霧四塞」⁽⁴⁴⁾という四字熟語がある。「天下が乱れる前兆として辺り一面が黄色い霧で覆われる」と言う意味であるが、まさにパリは天下が乱れていたのではないだろうか。漱石のみならず当時の日本人は漢文には長けていた。この四字熟語も吉田松陰の「黄霧四塞すといえども蒼天なきに非ず」という句とともに良く知っていたはずだ。パリの町に「影法師」すなわち「暗殺者」がいたのだろうかとかパリの騒動の様子を表しているのではなからうか。

第五句もよくわからない句である。日本、子規に関する読みも可能かもしれないが、もう一つの読みもあり得ないだろうか。「薄」は「幽霊の正体見たり枯尾花」など怪しいものを暗示する言葉である。招かない怪しいもの「暗殺者」がいるのに、ゾラはメダンから帰って来てしまったとゾラの死を惜しんでいるとも読めないだろうか。

ゾラの死を契機に、社会をも動かす文学とはなにか、どのような文学がこれからの日本に必要なのかという問題に突き当た

る。漱石が九月に精神的に苦しんだのは、二年の留学が終わるにあたって何を自分は掴んだのか、帰ってからのようにすればいいのかという悩みも重なったのではないか。だが今フランスの文学者たちが命をかけた社会のため奮闘しているのを知り、自分がなすべきことはなにか、深く考えていたのではないだろうか。

そして一九〇二年二月五日帰国の船に乗る。それ以上残ることはできなかつただろう。帰国後漱石は東京大学の教師となるも、二年後「吾輩は猫である」を『ホトトギス』に連載する。先に帰国した浅井は東京に帰らず、京都で図案改革運動を展開する。漱石はそれから二、三年旺盛な創作活動を行う。作品『吾輩は猫である』(上…明治三八・一〇、中…明治三九・一一、下…明治四〇・六、大倉書店)から『様虚集』(明治三九・五、大倉書店)や『虞美人草』(明治四一・一、大倉書店、そして『行人』(大正三・一、大倉書店)までの装丁をアール・ヌーボー様式を用い、橋口五葉に任せる。挿絵は『吾輩は猫である』上巻を中村不折、中・下巻を浅井忠に描いてもらう。自分の作品をアール・ヌーボー様式で装丁することはパリで見たサミュエル・ピングの品々、また印象派の、西欧の芸術が心に残ったに違いない。「生活に芸術を」である。最初は日本の芸術が劣っていると卑下したが、すばらしいと思つたフランスのものは日本の芸術の影響を受けたものであり、西欧人は日本のものを熱狂的に受け入れ、それをもとにまた自分たちの新しい芸術を作り出していたのだ。漱石の蔵書にあるヴァルトシュタイン『一九世紀美術』

(Waldstein, C. (1903). *Art in the nineteenth century*. Cambridge University Press.) に「Japan」に下線があり、脇に「origin of art nouveau」(アール・ヌーボーの起源)と書き込まれている⁴⁵⁾。アール・ヌーボーの様式が日本起源であることを明白に認識していた。これから自分たちも西欧のものに学び、また日本独自の芸術を作り出した。それは美術だけではなく、文学においても同様である。良いところは受け入れたい。フランス文学のみならず、もちろん英国、ドイツ、ロシア文学からも。それは単なる真似ではない。フランス人が日本のものを受け入れ、また彼らなりの新しい芸術を作ったように、日本人も西欧のものを受け入れ、また日本人なりの新しい芸術を、日本人りのヌーボー(新しい)・アール(芸術)を作り出して、こうと決意したのである。それがまさに他者にも配慮する「自己本位」である。浅井ともそのようなことを話あつたろう。橋口五葉を選んだのも彼が藤島武二の教えのみならず独学でアール・ヌーボー様式を学び、もとは狩野派の絵も学んでいたのだ、高い独創性を評価したのである⁴⁶⁾。『「ころろ」(大正三・九、岩波書店)の装丁は漱石自身がする。全集の装丁でもある赤い地に緑の石鼓文の拓本は模様のようにも見える。挿絵は屈原風の「先生」が横たわり空中に浮かぶ心臓のようなものを眺めている。さらに赤い大きなはんこ状の中にはラテン語で「ars longa vita brevis」(人生は短く、芸術は長い)と言う文字が金色で書かれている。それはまさに東洋と西欧の融合の頂点ではなかったか。

装丁だけではなく、「ころろ」の内容に関しても、西欧のもの

を背景に、独自の作品を作り出したのである。それに関して一九四〇年の *France-Japon* でパスカル・ロー(Pascal Lau)⁴⁷⁾は、漱石がポール・ブルジェの『弟子』と『現代心理論集』を学んだが、ブルジェのように独断的ではなく小説として、偉大な小説として完成したと述べている⁴⁸⁾。日本文化を取り入れ、新しい芸術を作ったフランス人だったからこそ漱石がフランス文学を学び、また独自の文学を創造したと評価できたのである。

浅井忠もまた同じ思いを持ち、京都で独自の図案改革をはかるが(もちろん絵画も多く描いた)、その期間は短く、一九〇七年に亡くなってしまふ。漱石の残念な思いは作品に現れ、「創作家の態度」(明治四一・二、朝日講演会)や「三四郎」の「深見先生遺画展」、「それから」(朝日新聞)明治四二・六・二〇)の代助が使う浅井黙語の茶碗に現れている。

中村不折は一九〇五年一月、フランスから帰国すると、漱石は「吾輩は猫である」、「幻影の盾」(『ホトトギス』)／『深虚集』明治三五・四)や「カーライル博物館」(『学鏡』)／『深虚集』明治三五)の挿絵を依頼する。両家を違いに訪問したり、食事をしたり、歌舞伎を観に行ったりと親しくしている。帰ったばかりの不折との交友はなにを意味するのだろうか。不折はその後画家として、書家として大成する。

それではスコットランドについて書いているものに関してはどうか。「永日小品」の「昔」はスコットランドに行った確実な証拠ではないのか。しかし塚本利明は次のように語る。

漱石の筆致は終始印象派ふうのそれであり、この短編からはこのスコットランド旅行に関する具体的な事実はまったく読み取れない。

（塚本利明『漱石と英国——留学体験と創作の間——』彩流社、一九八七年九月、一八五頁）

たしかにこの作品は、スコットランドへ行つたという事実を証明するものにはならない。この作品は創作ではないのだろうか。事実ではないことがいくつかあるのである。まず短いなかに「時代が付く」「古い」「寂びる」という古いに関する表現が多用されているが、そのモデルとされるディクソンの屋敷は、一八八七年に建てられ、一九〇二年ころはまだ一五年程しか経ていず、新しい日本庭園も作られつつあり、そのような古い印象を持ってはいはずである。家の外壁も鼠色で古く表現され「幾年一〇月の日が照つたのか」とかなりの時代を経た屋敷の状態が描かれる。西欧の家は年月を経たものも多く普通はそのような表現でもおかしくはないが、この家に関しては妥当ではないだろう。

さらにその壁に這うのは薔薇である。小さな薔薇ではなく、「大きな弁は卵色に豊かな波を打つて」と香もかおる大きな薔薇がいくつか咲いていると表現されているが、スコットランドの一〇月に薔薇は咲かない⁽⁴⁹⁾。スコットランドの薔薇の季節は六く七月である。夏でも二〇度を超えないが、緯度の関係で日照時間が長く（午前三時〜午後二時頃まで）、夏には薔薇が咲く。

しかし夏至を過ぎると日照時間は急激に短くなり、一〇月は午前七時四十五分頃〜午後六時頃まで、一二月は午後四時に日は沈む。一〇月の気温は最高一二度から五度程度になり、雨が多い。スコットランドの一〇月は初冬にあたりもう寒い。確かにそれほど極端に零下まで寒くはならないが、外壁に薔薇は咲かないだろう。そしてディクソンとおぼしき人と谷歩きをした後、薔薇の数が落ちていると書かれているが、寒い谷に薔薇は咲いていたのだろうか。ハイランドの山奥に薔薇が咲いていたということは考えにくい。薔薇が咲くには二〇度程度の気温、日照時間、水はけのよさが必要である。一度程度の気温、雨の多さ、日照時間のどれをとっても一〇月のピトロクリに「大きな弁」の薔薇は咲かないであろう。日本の一〇月であれば薔薇は咲くことができるが、スコットランドの国花はアザミである。ピトロクリの近隣のお城は今でも一〇月になると拝観をやめ閉館する。薔薇が咲いているとしたらそのようなことがあるだろうか。

後半は特にスコットランドの特徴「スコッチファー・キリクランキー」を強調しているが、知識として手に入るものである。漱石の筆はいくらかのスコットランドの特徴をもとに、あたかも自分がそこにいたかのように描きだすが、写真とは言いがたいのではないか。彼は実際にこの屋敷を見たのだろうか。多古吉朗もスコットランドを実体験し、これほど豊かなスコットランド体験について、漱石は何故、ごく限られた形しか筆にしかつたのかと疑問を持つ。写真ではないからといって行っていない

ないことの証明にはならないが、写真ではないことは、行ったことの証明にはならないだろう。

また角野喜六⁽⁵⁰⁾は岡倉由三郎からの藤代禎輔への手紙をもとに現地の警察でデイクソンのスコットランドの屋敷 (Dunraith *Manse*) を調査し発見したが、デイクソンがそこに居を定め日本庭園を作った時、日本人の庭師四人、大工二人、料理人一人、友人一人を連れてきて、屋敷の一隅に別棟を建ててそこに住まわせたという。多胡吉郎も漱石がそこに行つたとされる時期に日本人たちはいたと確認しているので、本当に漱石がそこに行つたのなら、なにか発言があつてもいいのではないか。この日本人たちについて言及があつたら、スコットランドへ行つたという確かな証拠になるだろうが、漱石はなにも発言していない。「宏壮な邸宅」という非常に抽象的なものはどこにでもたくさんあるだろう。

たしかに坂元雪鳥の「修善寺日記」ではスコットランドについて語っている。リスの話になり、雪鳥が、西洋では公園なんかに居るんですつてねというところ、

左様だらうね、…蘇格蘭を旅行したとき、山路で馬車で通つてるとね、道端の木にチョイ〜と飛んで遊んでた。⁽⁵¹⁾

と答えている。このときの漱石の返事は奇妙である。ロンドンの公園にはリスがたくさんいて、漱石はそれを見ているはずである。「左様だらうね」とは非常にあいまいである。ロンドン

にもリスがいることを認めたくないかのようである。なぜか。この時点で「永日小品」の「昔」は発表され、リスもスコットランドの特徴として記述している。ロンドンでもリスがいることを認めるとスコットランドの特徴とはならないからである。さらに雪鳥は「彼所辺は語は大分違ふんでせうね」と問うと漱石は「イングリッシュで立派に通る」と答えている。たしかに英語で通るが、発音はかなり違い、英国人でも聞き取りには苦労するということである。漱石自身留学の最初にエディンバラへの留学を考えたが、「エディンバラ辺の英語は大分ちがう先ず日本の仙台弁のようなものである」(書簡二二七)と違いを認識しているが、この時の答えはあまり具体性がなく、実際に現地の人と会話したのだろうかという疑問がおこる。

五、おわりに

英国からだけの視点で見ると、漱石の留学の終わりは静かなスコットランドでところを癒やしたとされている。しかし同時期のフランスに一度目を向けたならば、ゾラの死、パリの騒動、浅井忠や中村不折との文化交流、デイクソンが漱石帰国の五日あとに、美術関係ことについてロンドンで語ったことは紛れもない事実であり、それらのことを、漱石が知っていたということも確実なことである。ゾラの死は同じ日に新聞にのるくらい情報的に近い場所であった。ゾラの死は確実に漱石の耳に入つたことである。それまでドレフュス事件を知らなかったとして

も、ゾラの死により考えるようになったはずだ。そしてゾラが果たした役割についてもである。そこから漱石は文学が社会の行方にさえも係わる重要なものであることを知る。

文芸トハ如何ナル者ゾ

文芸トハ開化ニ如何ナル關係アルカ進化ニ如何ナル關係アルカ

日本目下ノ狀況ニ於テ日本ノ進路を助クベキ文芸ハ如何ナル者ナラザル可ラザルカ

(漱石の英国留学時のノート、『漱石全集』第二卷、岩波書店、一九一七年六月、七〇二頁)

文学とは何か。文学とはただの娯楽ではなく国の進路さえ助けるものである。社会の方向性にも係わるのだということを認識したのである。フランス文学を学ぶことで文学の価値、重要性を認識したのである。自分が日本に帰って、なすべきことが見えてきたのである。ゾラの文学を批判しているところもあるが、ゾラの文学者としての生き方、フランスの文学者たちの一ユダヤ人の冤罪をめぐる戦う態度に深い感銘を受け、その後の人生を送ったのではなからうか。帰国後一九〇六年一〇月二三日、狩野亨吉に宛てた手紙に、

僕は洋行から帰る時船中で一人心に誓った。どんなことがあろうとも十年前の事実は繰り返すまい。今迄は己れの如

何に偉大なるかを試す機会がなかった。己を信頼したこと
が一度もなかった。朋友の同情とか目上の御情とか、近所
近辺の好意とかを頼りにして生活しやうとのみ生活してゐ
た。是からはそんなものは決してあてにしない。妻子や親
族すらもあてにしない。余は余一人で行くところ迄行つて、
行き尽いた所で斃れるのである。

(『漱石全集』第三卷、岩波書店、一九九六年三月、六〇〇頁、書簡
一六九〇)

ゾラは「真実」「正義」のために戦い、人から批判されよう
と最後まで自分の信じることを貫き、文学も批判に晒されて
も諦めることなく書き続けた。そして非業の死を遂げた。漱石
はそのままであれば教授としての地位は間違いないかつたろう
に。ただ文学を創作することを生涯の目標とし、互いを切磋琢
磨するのを樂しみ、批判に晒されても、日本の文学が発展する
のを期待し、創作し続けたが、道半ばで倒れてしまった。血を
吐き、苦しもうと最後まで書き続けることをやめなかった。最
後まで信念を通じたゾラのように。

この旅は、漱石の人生の上で大きな転機になり、漱石という
文学者が成立する上で重要な旅であった。そして日本独自の文
学を目指し、近代化した日本社会の中で、文学とはなにか、な
にゆえ文学が必要なのか、どのような文学が必要なのかと問い、
社会の発展に寄与しようとした。近代日本社会のなかで生き
る人間の問題を取り扱い、そこでいかに生きべきなのか、近代

に生きる人間の苦しみ、喜びを描こうとした。そして西欧の理論を背景にもち、新しい日本の文学を創作したのである。

*旧字は新字に改め、ルビは適宜省略した。

【注記】

- 1 多胡吉郎『スコットランドの漱石』文芸春秋、二〇〇四年九月、一三頁
- 2 原武哲、石田忠彦、海老井英次編『夏目漱石周辺人物事典』笠間書院、二〇一四年七月、九二頁。藤代禎輔（一八六七〜一九二七）京都帝国大学教授。ドイツ文学者。筆名・素人。一高帝大時代の同窓。旧制高校教授では初めて文部省官費留学生として漱石と同じ船でヨーロッパに渡航。
- 3 前掲2、二六〇頁〜二六四頁。岡倉由三郎（一八六八〜一九三六）英語学者。時代の英学の泰斗として日本の英語教育分野の開拓者となった。
- 4 出口保夫『ロンドン漱石文学散歩』旺文社、一九八六年五月、二二八頁
- 5 角野喜六『漱石のロンドン』荒竹書店、一九八二年五月、二〇三頁
- 6 塚本利明『漱石と英国——留学体験と創作の間——』彩流社、一九八七年九月、一八三頁
- 7 渡辺一民『ドレーフェス事件——政治体験から文学創造への道程——』筑摩書房、一九七二年一〇月、二八九頁
- 8 ドレーフェス事件は複雑な事件で、文学の問題ならず、ユダヤ人問題、社会主義社たちとの問題、新聞などの問題など様々な観点から論じられている。ここでは文学のことに特化して考察する。
- 9 稲葉三千男『ドレーフェス事件とゾラ』青木書店、一九七九年一月、二〇七頁
- 10 前掲7、二八頁

- 11 前掲7、三四頁
- 12 前掲7、九一頁
- 13 Paul Bourget. (1902). *L'Étape. Plan-Nourrit*. Hachette. (ポール・ブールジエ『宿駅』内藤濯訳、岩波書店、一九五四年四月)
- 14 小倉考誠『時代を読む・一八七〇〜一九〇〇』(ゾラ・セレクション一〇巻)藤原書店、二〇〇二年一月、一一五頁
- 15 マックス・ノルダウ『現代の墮落』中島茂一訳、大日本文明協会、一九一四年三月、二八頁
- 16 ジャン・ピエロ『デカダンスの想像力』渡辺義愛訳、白水社、二〇〇四年六月、三六九頁
- 17 山本順二『漱石のパリ日記——ベル・エポックの一週間——』彩流社、二〇一三年一二月、四三頁。パリ万国博覧会は一八五五、六七、七八、八九年に開催され、一九〇〇年は第五回目にあたる。日本は六七年に初めて出品。
- 18 宮下志朗・小倉考誠『いま、なぜゾラか——ゾラ入門』藤原書店、二〇〇二年一〇月、一七二頁
- 19 Death of M. Emile Zola. (1902, September 30). *The Times*, pp.3-4.
ゾラの突然の死に驚き、パリでは最初ドレーフェス派の陰謀だと思われるゾラの死が信じられなかったこと、さらに召使いの証言や、死亡時の様子を詳しく記述している。記者や医師も疑問点があることを報じ、他殺の可能性をおわせている。そしてゾラ夫人は息を吹き返したことで、お父さんがギリシャ系イタリア人だったので、イタリアでも悲しみが広がっていることなどが書かれている。さらにゾラの生い立ち、アセット社で働いていたころ貧しかったこと、ルーゴン・マッカール叢書は人間喜劇

にも比するものであること、数ヶ月隠れていたがロンドンから勝利してフランスに帰ったこと、また文学の容易な道から政治の赤い道への移行は彼の人生で最も見事なことであると詳細な記述がなされている。

- 20 前掲7、二九〇頁
- 21 大野芳材「浅井忠小論」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』二〇号、青山学院女子短期大学総合文化研究所、二〇一二年一月、一〇七頁。日本の出品作は工芸品が中心だったが、日本画家九二人、西洋画家三七人、黒田清輝、久米桂一郎、和田英作の作品なども展示した。
- 22 虚子記「浅井先生送別会」『ホトトギス』第三巻第四号、ホトトギス社、一九〇〇年一月、三五頁
- 23 前掲2、二五七頁〜二六〇頁
- 24 大廣典子「正岡子規と印象派、紫派——俳句革新における洋画新派の位相——」『阪大比較文学』七号、阪大出版会、二〇一三年三月、九四頁
- 25 前掲21、九七〜一〇一頁
- 26 前掲24、一〇二頁。イタリアで古典的学校教育を受けた後、スイス、フランス、ロンドンですごしバルビゾン派（コロ、ミレー等）を学ぶ。
- 27 稲賀繁美『絵画の東方』名古屋大学出版会、一九九九年一月、一七二頁。林は一九〇〇年のパリ万博で日本部事務次官として日本の国宝級の歴史的遺産をパリに輸送する大任を果たす。しかし一八九〇年から一〇年間で一五万ほどの浮世絵を海外に流出させ「国賊」とまでいわれた。
- 28 前掲27、一五三頁。「北斎の人氣は爆発的であり、次第に巨匠と評価されるようになる。一介の浮世絵師は、ジャポニズムの渦中で、ミケランジェロ、ルーベンス、レンブラントの匹敵する巨匠の地位を得るようになるのだ。」（略）北斎の神格化の背後には、いつたたいかなる条件が潜
- 29 伊藤徹「世紀転換期のヨーロッパ滞在——浅井忠と夏目金之助」『関西大学東西学術研究所紀要』四一号、関西大学東西学術研究所、二〇〇八年四月、二二頁
- 30 サミュエル・ビング『藝術の日本 1888〜1891』（大島清次監修、芳賀徹・瀬木慎一・池上忠治訳、美術公論社、一九八一年一月）。毎号数多くの美しい浮世絵で彩られた『芸術の日本』は、フランス語、英語、ドイツ語の三か国語に訳された。
- 31 大島清次『ジャポニズム——印象派と浮世絵の周辺——』講談社、一九九二年二月、二四七〜二四八頁
- 32 前掲21、二頁
- 33 多胡吉郎『スコットランドの漱石』文藝春秋、二〇〇四年九月、三〇頁。J. H. Dixon. (1902). On some Japanese Artists of To-day. *Transactions and Proceedings of The Japan Society*, 1(4), 152-166.
- 34 前掲33、一五六頁
- 35 前掲33、一五六頁
- 36 前掲33、一五七頁
- 37 前掲33、一五七頁
- 38 中村不折「巴里より来状」『ホトトギス』第五巻第九号、ホトトギス社、一九〇二年六月、二三頁
- 39 『漱石全集』第二十一巻、岩波書店、一九九七年六月、六七七頁。「不折ノ下駄ノ齒入ト軒ヲ並ベテ居ルヤ一月一五円ノ収入アラバ以テ満足スベ

シト思ヘルコト屢有リト言ヘリ」。「下駄の菌」という表現は実際に見たものではないか。それとも伝聞か。また比喩として使われているのか、断定はできない。

40 前掲17、一三六頁

41 前掲33、一六二頁

42 出口保夫、アンドリユー・ワット『漱石のロンドン風景』研究社出版、

一九八五年八月、二九頁。倫敦ノ町ニテ霧アル日太陽ヲ見ヨ黒赤クシテ血ノ如シ、鶯色ノ地ニ血ヲ以テ染メヌキタル太陽ハ此地ニアラズバ見ル能ハザラン（日記）このようにロンドンの霧は黒に近いものであり、「霧黄なる」とは表現できないものではないか。

43 前掲4、二〇四頁。ターナーの作品は、テート美術館に最も多く所蔵されていて、漱石は文学論などの著作で言及している。ターナーは黄色をよく使ったと言われているが、漱石はその筆致、風景画の特質に注意している。

44 「帝紀 表志」『漢書』上卷、小竹武夫訳、筑摩書房、一九七七年六月、

九〇頁

45 尹相仁『世紀末と漱石』岩波書店、一九九四年二月、一三九〜一四〇頁

46 前掲45、一四五頁

47 Pascal Lau. (1940). *Lorsqu'un Français lit "kokoro", France-Japon*, 47, 231.

48 拙稿「夏目漱石『こころ』とポール・ブールジェ『弟子』を比較して——唯物論的決定論との対比の視点で——」『九大日文』二五号、九州大学日本語文学会、二〇一五年三月、二三〜三五頁

49 地球の歩き方編集室『地球の歩き方潮水地方&スコットランド』ダイヤモンド社、一九九六年四月、三七九頁。藤岡友宏『バラ——四季の手入れ』誠文堂新光社、一九九二年六月、三〇頁

50 前掲5、二〇九頁

51 坂元雪鳥「修善寺日記」（遺稿）『国学』八号（坂本雪鳥先生追悼号）、日本大学国文学会、一九三八年七月、一三頁

（近畿大学産業理工学部非常勤講師）